

フィリッポ・バルビエーリの12人の シビュラについて (1)

伊藤博明*

はじめに——イタリアの中世・ルネサンスにおけるシビュラ

筆者は『専修人文論集』第102号(2018年3月)に所収の「サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のシビュラ像」において、イタリアにおける最初期のフレスコ画のシビュラ像(11世紀後半)について論じた。そして、『専修大学人文科学年報』第48号(2018年3月)に所収の「セッサ・アウルンカ大聖堂のシビュラ像について」において、このフレスコ画に続く13世紀中頃の説教壇に彫られたシビュラ像について紹介し、あわせて、ラテン教父のクウォドゥルトデウスの『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』(*Contra Iudaeos, Paganos et Arrianos*)、および12世紀に成立した新しい典礼劇のジャンルである『預言者たちの行列』(*Ordo prophetarum*)との影響関係について論じた。

また『専修人文論集』第103号(2018年11月)に所収の「パラッツォ・オルシーニの12人のシビュラについて」においては、中世後期に出現した、主にトスカーナ地方におけるピサーノ一族によるシビュラ像の創出について瞥見したうえで、15世紀初頭にローマのパラッツォ・オルシーニの「カメラ・パラメンティ」に描かれた12人のシビュラ像について考察した。この壁画は現存していないが、それらの図像とそこに記された託宣を説明

*専修大学文学部教授

している写本『キリストの受肉についての12人のシビュラの予言』(*Prophetie XII sibillarum de incarnatione Christi*) がヨーロッパの図書館・文書館に複数残されており、拙論では、そのテキスト・クリティクと邦訳を試みた。

さらに、『専修人文論集』第110号(2022年3月)に所収の「バッチョ・バルディーニによる12人のシビュラ像」において、『キリストの受肉についての12人のシビュラの予言』に強い影響を受けて、1470年代初頭にフィレンツェで制作された、バッチョ・バルディーニによる12人のシビュラを描いた銅版画のシリーズについて考察した。また、上述の拙論においては十分に言及することのできなかった、ヨーロッパ中世において広く名前が知られていた、クマエ、エリュトライ、ティブルの各シビュラについて検討するとともに、また、時代的にパラッツォ・オルシーニの壁画とバッチョ・バルディーニの銅版画に間に存在した、複数のシビュラの出現例について、1454年6月のフィレンツェにおける洗礼者聖ヨハネの祝日のページェント、1460年代にフィレンツェで制作された『図解年代記』について、そして1471年にフィレンツェのサンタ・フェリーチェ・イン・ピアッツァ聖堂において演じられた、フェオ・ベルカーリ作の聖史劇についても紹介した。

本稿では、1481年にローマで刊行されたフィリッポ・バルビエーリの『聖なる博士たち、ヒエロニムスとアウグスティヌスの不一致』(*Discordantie sanctorum doctorum Hieronymi et Augustini*) に収められた、12人のシビュラの託宣集と図像について紹介したい。この託宣集は、上述の『キリストの受肉についての12人のシビュラの予言』の影響を強く受けて成立したものであるが、テキストとして初めて刊行されたものである。そして、本書は同年に、初版と同じ奥付を有する再版が、続いて翌年の1482年には第三版が刊行され、その後のヨーロッパにおけるシビュラのテキストと図像の流布において、多大な影響を及ぼした¹。

1 フィリッポ・バルビエーリの生涯と著作

フィリッポ・バルビエーリ (Philippo Barbieri / Filippo Barberi / Philippus de Barberiis) は、1426年頃にシチリアのシラクアで生まれ、若くして当地のドミニコ会修道院に入った²。おそらくカタニアに移り、そこで長い間暮らしたと思われる。というのは、1461年12月12日に、カタニア大学での学士号授与の際に、彼は当地の司教の代理として列席したことが記録から判明しているからである。

バルビエーリはおそらく、1450年にピエトロ・ロンサーノの支援のもとで開講された学校で神学を教え、哲学者として、また雄弁家として有名になった。1474年以前に2回にわたって、ハンガリーのマティアス・コルヴィヌス王の宮廷に派遣され、そこで高く評価されたようで、王から終身年金を賦与するという申し出を受けている。1474年に彼は、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院で、またそのすぐのちに、ナポリのアラゴン家の宮廷において説教をおこなう機会を得た。1474年7月25日に、バルビエーリはセビーリャに赴いたが、その目的については明らかではない。このスペインの滞在中に、彼は高官たちと宮廷から知遇を得た。翌年の2月20日に彼はイタリアに帰国し、ローマに呼び戻されたサルヴォ・カッセッタの後を継いで、シチリア、サルデーニャ、マルタの総宗教裁判所長に任命された。

1475年にバルビエーリは再びスペインに赴いたが、それは1233年にフェデリコ2世が宗教裁判所に与えた特権の確認を催促するためだった。その特権において皇帝は、異端者たちから没収した財産は、宗教裁判所、教皇庁、国庫の間で同じ割合で分割されることを定めていた。この特権は、おそらく1451年に、アルフォンソ大度王によってすでに確認されていた。ともかくも、バルビエーリは1477年10月2日、セビーリャのイザベッラ女王

に、10月2日、摂政フェルディナンドに、12月10日、フアン王に特権を確認させることに成功した。

1479年9月20日、バルビエーリはメッシーナの修道院長代理に任命された。しかし、1481年6月27日、彼は当時の著名人たち、たとえばパウルス2世とシクストゥス4世を中傷する小著を作成したとして難詰され、彼が就いていたすべての役職を免じられた。そのいきさつは不明であるが、翌年の1月25日になってようやく許されて、彼が以前に従事していた役職に復帰した。

この出来事のあと、バルビエーリはシチリアに帰り、1485年6月30日には、「宗教裁判所長フィリップス師」の承認のもとに、ピエトロ・フィケラという名前のパレルモのドメニコ会士がシチリアの総宗教裁判所長代理に任命されている³。彼はその後、1487年に死去するまでパレルモに留まった。彼の遺体は当地のサン・ドメニコ聖堂に埋葬された。

バルビエーリは有能な教会人であるばかりか、神学者、哲学者、歴史家（年代記作家）としても著名であったが、その著作の多くは匿名で刊行された。『きわめて著名な教皇と皇帝の年代記』（*Cronica summorum pontificium et imperatorum*）は、リッカルド・フェッラレーゼによる年代記の続編を企てたもので、1316年から1469年までの期間を扱い、アラゴンフェルディナンド2世と教皇シクストゥス4世で終わっている。本書は1743年7月にローマにおいて、匿名で、メッシーナ人の出版者ジョヴァンニ・フィリップポ・デ・ラニャミネによって刊行されたが⁴、長らく誤って、このジョヴァンニが著者と見なされてきた⁵。1474年2月にローマで、ヨハネス・シュレナーによって再版が刊行され⁶、また1477年8月にトリノで、ヨハネス・ファブリ・リングネンシスによって刊行されている⁷。

またバルベリーニは、『著名人年代記』（*Virorum illustrium cronica*）を執筆し、対象とする人物の範囲は世界の始まりから1469年にまで及んでいる。それはアラゴンフェルディナンド2世、あるいは彼の妻である、カ

ステイーリャのイザベッラ 1 世の要請に応じて作成された。おそらくはバルベリーニは、スペイン宮廷に受け入れられることを願って刊行したのだろう。この年代記では興味深いことに、同時代の人文主義者たちに言及されている。たとえば、パノルミータ（アントニオ・ベッカデッリ）、ロレンツォ・ヴァッラ、フランチェスコ・フィレルフォ、グアリーノ・ダ・ヴェローナ、レオナルド・ブルーニである。本書はおそらくセビーリャにおいて、1476年4月7日以前に刊行された⁸。

バルベリーニは1481年にローマで、『教皇シクストゥス 4 世を称える讃歌』（*Carmen laudem Sixti IV*）という小冊子を刊行した⁹。そして、1481年から87年の間に、おそらくナポリで、『魂の不死について。神の摂理、世界の統御、人間の運命と拒絶について。聖なる博士たち。ヒエロニムスとアウグスティヌスの不一致』（*De animorum immortalitate. Add: De divina providentia, mundi gubernatione et hominum praedestinatione atque reprobatione. Discordantiae sanctorum doctorum Hieronymi et Augustini*）が刊行された¹⁰。この著作の最初の二つの論考は、バルベリーニがトマス主義の立場から、人間の運命と神の恩寵に論じたものである。後者は、1481年にローマで刊行される小論集（後述）に再録されている。

2 フィリッポ・バルビエーリ的小論集

1481年にローマでフィリッポ・バルビエーリの『聖なる博士たち、ヒエロニムスとアウグスティヌスの不一致……』（*Discordantie sanctorum doctorum Hieronymi et Augustini ...*）が刊行された¹¹。これは論考集であり、その内容は以下のとおりである。

[1 r] フィリッポ・バルビエーリの教皇シクストゥス 4 世への「序文」(Joannis Philippi de Lignamine. Equitis Siculi. Ad Six. III. Pon. Max. Prefatio)

- [3r] 聖なる博士たち、ヒエロニムスとアウグスティヌスの不一致 (Discordantiae sanctorum doctorum Hieronymi et Augustini)
- [46v] シビュラたちの正しい予言 (Dicta propria Sibyllarum)
- [20r] プロバ——「ローマのプロバの詩篇」(Proba: Probe Romane carmina)
- [36v] [偽] トマス・アキナス『アタナシウス信条』についての序文 (Praefatio super symbolum Athanasii)
- [45v] ドミニコ会の説教についての解説 (Explanatio super orationem dominicam)
- [49v] 福音の挨拶についての解説 (Explanatio super euangelicam salutationem)
- [52v] 「神よ、汝を讃えます」についての解説 (Explanatio super Te Deum laudamus)
- [61r] 神学者ドナトゥス (Donatus theologus)

ここで取り上げるのは2番目の論考「シビュラの正しい予言」である。それまで「シビュラの託宣」として印刷されたものは、ラクタンティウスの『神学教理』(*Institutiones divinae*)に散見される『シビュラの託宣』(*Oracula sibyllina*)からの引用と、アウグスティヌスの『神の国』(*De civitate Dei*)第18巻第23章における、『シビュラの託宣』第8巻の「エリュトライのシビュラの託宣」、および、『神学教理』に基づく託宣集しか存在しなかった。バルビエーリの書物において初めて、シビュラの託宣が12名のシビュラの名前と結びつけられ、一種の託宣集として現れたのである。

そこでは12名のシビュラの名前が挙げられており、最初から順に、ペルシア (PERSICA)、リビア (LIBICA)、デルポイ (DELPHICA)、エメリア (EMERIA)、エリュトライ (ERITHREA)、サモス (SAMIA)、クマエ (CVMANA)、ヘレスポントス (HELLESFONTIA)、ピュリギア (PHRIGIA)、エウロパ (EVROPEA)、ティブル (TIBVRTINA)、アグリッパ (AGRIPPA)である。従来は、ラクタンティウス『神学教理』第1巻第6章が伝える、

ウァッコが『古代の人事と神事』(*Antiquitates rerum humanarum et divinarum*)で挙げている10名のシビュラが知られていたが¹², バルビエーリはエウロパのシビュラとアグリッパのシビュラを加えている。これは15世紀に初頭に、ローマのパラッツォ・オルシーニの「カーメラ・パラメンティ」に描かれた12人のシビュラ像(と12人の預言者像)を伝えている『キリストの受肉についての12人のシビュラの予言』(伊藤「パラッツォ・オルシーニの12人のシビュラについて」を参照)の影響である。

12名のシビュラには簡素な木版画が添えられてはいるが、同一の版画がペルシア、デルポイ、クマエ、ヘレスポントス、ピュリギアの各シビュラに、別の同一の版画がリビア、エメリア、サモス、エウロパ、アグリッパの各シビュラに配されている。エリユトライトとティブルのシビュラだけが独自の図像で表わされているだけで、他のシビュラについて容姿などから差別化することはできない。

このバルビエーリの著作は、初版と同一の奥付をもった再版が刊行され¹³, その翌年の1482年には第三版が刊行された¹⁴。再版においては、託宣についても初版との異同が見られるが、大きく変わった点は、リビアとアグリッパのシビュラを除くシビュラが独自の図像で表わされたことである。さらに、注目すべきは、すべてのシビュラに対して預言者が、次のように対となって描かれていることである。すなわち、ペルシアーオセア, リビアーエレミヤ, デルポイーエレミヤ(重複), エメリアーヨエル, エリユトライトーエゼキエル, サモスーダビデ, クマエーダニエル, ヘレスポントスーヨナ, ピュリギアーマラキ, エウロパーゼカリヤ, ティブルーミカ, アグリッパーイザヤ, である。

前2世紀中葉から後3世紀初頭にかけて、のちに『シビュラの託宣』として編纂される、ギリシア語によって記されたユダヤ教=キリスト教的文書群が成立した。上述したように、ラクタンティウスはこの文書を知っており、それに含まれているいくつかの託宣を、アウグスティヌスやクウォ

ドウルトデウスはヨーロッパ中世に伝えた。こうして、ルネサンス期において、ユダヤ教における預言者の地位を、シビュラはギリシア・ローマの異教的世界において得た者として再び脚光を浴びることになった。

バッチョ・バルディーニは1470年代にフィレンツェで、シビュラとともに預言者についても銅版画のシリーズを制作し、15世紀末にペルージャのコッレージョ・カンピオでは、ベルジーノが預言者とシビュラを6人ずつ描き、1492年には教皇庁のボルジア家の部屋に、ピントゥリッキオが12のルネッタにシビュラと預言者を12組描いている。そして、1509年から11年にかけてシステーナ礼拝堂の天井に、ミケランジェロが5名のシビュラと7名の預言者を描くのである¹⁵。このような表現に先鞭をつけたのは、上述したパラッツォ・オルシーニの「カメラ・パラメンティ」であり、そこでも12人のシビュラと12の預言者が対にされているが、しかし、シビュラとは異なり、預言者に関してバルビエーリは、このテキストから影響を受けてはいない。

再版においては、シビュラと預言者に続いて、ほぼ裸体で歩く「キリスト」(CHRISTVS)が描かれ、『イザヤ書』(53・6-8)の言葉が記されている。次ページには「洗礼者ヨハネ」(IOHANNES BAPTISTA)の姿が描かれ、『ヨハネによる福音書』(1・29)から「見よ、神の子羊だ。見よ、世の罪を取り除く方だ」という言葉と、『イザヤ書』(40・3-5)の言葉が記されている。次ページには「聖母マリア」(MARIA VIRGO)として、家畜小屋の前で、幼子に向かって手を合わせるマリアの姿が描かれている。その下の文言は、クリスマスの祈禱文(Latebundus exultet fidelis chorus alleluya...)が記されている。そして、最後の図版は「哲学者プラトン」(PLATO PHILOSOPHVS)であり、挿図の姿は、オセアおよびマラキの姿と同一である。文言には『ヨハネによる福音書』の冒頭から、「プラトンは言った。はじめにことばがあった……」と記されている。

第三版では、理由は分からないが、預言者が除かれて、再びシビュラの

シリーズだけとなり、一方、図像についてはさらに詳しく描かれている。託宣についてはほぼ再版と同一であるが、異同のある箇所も存在している。以下、三つの版についてシビュラ、および預言者の託宣を紹介しつつ、それらの典拠について、またそれらの異同について考察することにした¹⁶。

3 12人のシビュラの図像と託宣

テキストでは図像集に先だって、次のように述べられている。

Nunc afferamus in medium dicta propria Sibillarum: et que una queque earum dixerit, nec servabimus in hoc ordinem temporis: nec Dignitatis excellentiam sed secundum quod nobis occurrerit. (fol.6v.)

これからわれわれは、[シビュラの頭上の] 中央にシビュラたちの固有名を、そして彼女たちの各々が語ったこと書き記すことにするが、われわれはこのことにおいて、時の順序に、あるいは品位の優越さに従ったわけではなく、われわれが目にした順序に従っている。

以下、便宜的に A) = 1481年初版, B) = 1481年再版, C) = 1482年第三版と略する。託宣がほぼ同内容の場合は、邦訳は重複させない。

(1) ペルシアのシビュラ (SIBYLLA PERSICA) [図1 A) B) C)]。

- A) Sibilla persica cuius mentionem facit Nichanor de Christo sic ait. Ecce bestia conculcaberis: et gignetur dominus in orbem terrarum: et gremium virginis erit salus gentium: et pedes eius in valitudine hominum.
- B) Sibila Persia vestita veste aurea cum velo albo in capite. Dicens sic. Ecce bestia conculcaberis: et gignetur dominus in orbem terrarum: et gremium virginis erit salus gentium?: et pedes eius in valitudine hominum.

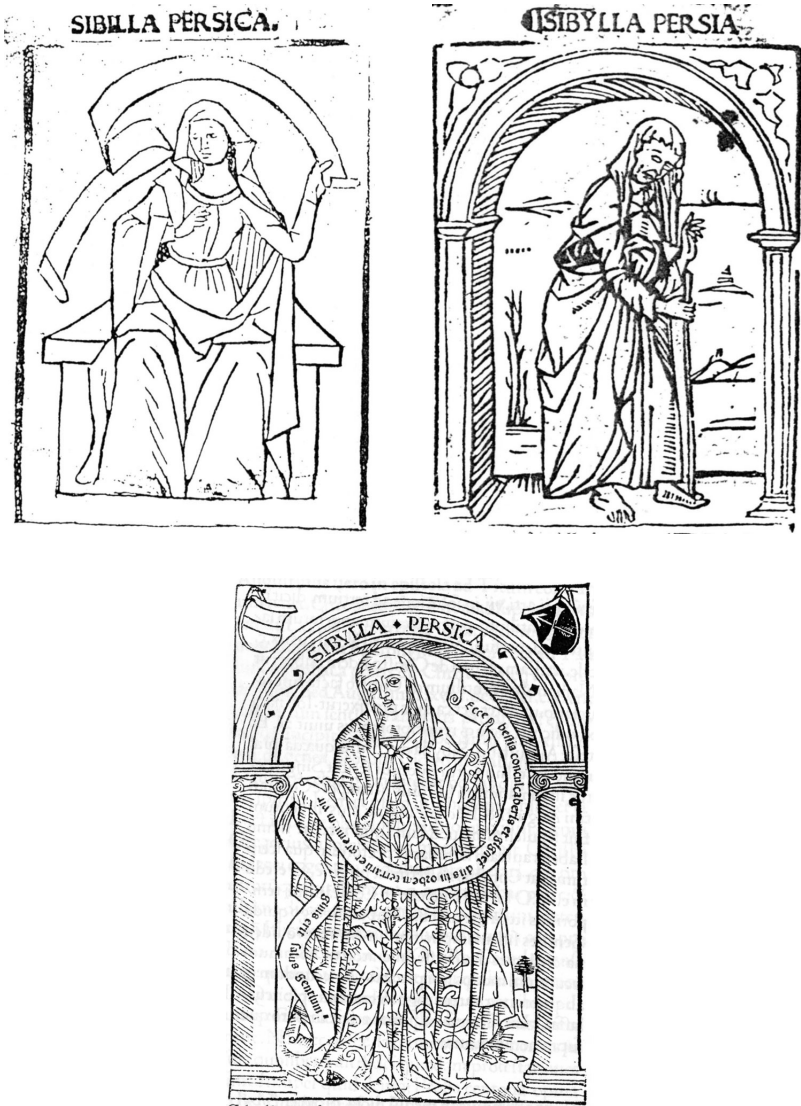


図1 ベルシアのシビュラ A) 初版 B) 再版 C) 第三版

- C) *Sibylla persica vestita veste aurea cum velo albo in capite. Dicens sic Ecce bestia conculcaberis et gignetur dominus in orbem terrarum. Et gremium virginis erit salus gentium et pedes eius in validudine hominum.*
- A) ペルシアのシビュラ。彼女についてはニカノルが言及しているが、彼女はキリストについて次のように述べている。見よ、獣は踏みつけられ、主が地上に生まれるだろう。そして、処女の胎は人々の救いとなり、彼の歩みは人間の安寧に向かうだろう。
- B) C) ペルシアのシビュラ。金色の衣服をまとい、頭にヴェールを被っており、次のように述べている。見よ、獣は踏みつけられ、主が地上に生まれるだろう。そして、処女の胎は人々の救いとなり、彼の歩みは人間の安寧に向かうだろう。

この託宣は『キリストの受肉についての12人のシビュラの予言』（以下『12人のシビュラの予言』）に見られるものであるが（伊藤「パラッツォ・オルシーニの12人のシビュラについて」[以下、伊藤「オルシーニ」] 84ページ）、もっとも近いのは初版である（ニカノルへの言及）。『12人のシビュラの予言』においても、ペルシアのシビュラは「金色の衣服に身を包み」（*in habitu derauto*）と描写されている。バルビエーリ再版の挿図では盲目の女性が右手で杖をついている。第三版の若い女性が手にしている巻物には「獣は踏みつけられ……」の託宣が記されている（第三版では以下の各シビュラも同様に、巻物に託宣が記されている）。

(2) 預言者オセア (OSEAS PROPHETA) [図 2]。

- B) *De manu mortis liberado eos: de morte redimam eos: ero mors tua o mors: ero morsus tuus o inferne.*
- B) 私は彼らを死の手から解き放つだろう。私は彼らを死から贖うだろう。おお、死よ、私がおまえの死となり、おお、冥府よ、私がおまえを咬むだろう。



図2 預言者オセア

この文言は『オセア書』(13・14)からの引用であり、挿図では、オセアは長い髭をもった老人として描かれている。

(3) リビアのシビュラ (SIBYLLA LIBICA) [図3 A) B) C)]。

- A) Sibylla libica cuius meminit Euripedes inquit. Ecce veniet dies et illuminabit dominus condensa tenebrarum et solventur nexus synahoge et desinent labia hominum: et videbunt regem viventium tenebit illum in gremio virgo domina gentium: et regnabit in misericordia: et uterus matris eius erit statuta cunctorum.
- B) Sibylla Libica ornata sero viridi et florum in capite: vestita pallio honesto: et non multum iuvenis. Sic ait. Ecce veniet dies et illuminabit dominus condensa tenebrarum et solventur nexus synahoge et desinent labia hominum: et videbunt regem viventium tenebit illum in gremio virgo domina gentium: et regnabit in misericordia: et uterus matris eius erit statuta cunctorum.

- C) *Sibylla lybica ornata sermo viridi et florum in capite vestia palio honesto et non multum invenis. sic ait Ecce veniet dies: et illuminabit dominus condensa tenebrarum et solventur nexus synagoge. Et definent labia hominum: et videbunt regem viventium tenebit illum in gremio virgo domina gentium: et regnabit in misericordia: et uterus matris eius erit stuta cunctorum.*
- A) リビアのシビュラ。彼女についてはエウリペデスが言及しているが、彼女は述べている。見よ、その日が来て、主が深い闇を照らすだろう。シナゴグの結び目は解かれ、人々の唇は閉ざされ、生ける者たちの王が見られるだろう。処女が彼を身ごもって諸国の女主人となり、慈愛の中で統治するだろう。彼の母の胎は万人の秤となるだろう。
- B) C) リビアのシビュラ。頭を新鮮な花々の冠で飾り、優美なマントを羽織り、年齢はきわめて若く、次のように述べている。見よ、その日が来て、主が深い闇を照らすだろう。シナゴグの結び目は解かれ、人々の唇は閉ざされ、生ける者たちの王が見られるだろう。処女が彼を身ごもって諸国の女主人となり、慈愛の中で統治するだろう。彼の母の胎は万人の秤となるだろう。

この託宣は『12人のシビュラの予言』で同名のシビュラに帰せられているが(伊藤「オルシーニ」84ページ)、最も近いのは初版である(エウリペデスへの言及)。バルベリーニ再版・第三版とも挿図は「優美なマント」を羽織ってはいるが、花冠は載せていない。花冠と「優美なマント」についてはバッチョ・バルディーニの12人のシビュラのシリーズ(以下、バルディーニ)の挿図に描かれている(伊藤「バルディーニ」, 120-121ページ)。

(4) 預言者エレミヤ (IREMIAS PROPHETA) [図4]。

- B) *Ieremias xiii. Ecce dies veniunt dicit dominus et suscitabo david germen iustum: et regnabit rex et sapiens erit: et faciet iudicium et iusticiam in terra: In diebus illis sanabitur iuda: et israhel habitabit considerenter.*



図3 リビアのシビュラ A) 初版 B) 再版 C) 第三版



図4 預言者エレミヤ

- B) エレミヤ, 13。主は言う。見よ, その日がやってくる。私はダビデのために正しい枝を起こし, 彼は王として治め, 智者となり, 地上に公正と正義を為すだろう。これらの日々には, ユダは救われ, イスラエルは安らかに暮らすだろう。彼が呼ばれる名とは, すなわち, 主, われらが義人, である。

この文言は『エレミヤ書』(23・5-6)に拠り, 挿図のエレミヤは髭を貯えた老人として描かれている。

(5) デルポイのシビュラ (SIBYLLA DELPHICA) [図5 A) B) C)]。

- A) Sibilla delphica que ante troiana bella vaticinata est: de que Crisippus ait.
Nasci debere prophetam absque matris coytu ex virgine eius.
- B) Sibylla delphica vestita veste nigra et capillis circumligatis in manu cornu tenens et iuvenis que ante troiano bella vaticinata est de qua Crysippus ait.
Nascetur propheta absque matris coitu ex virgine eius.

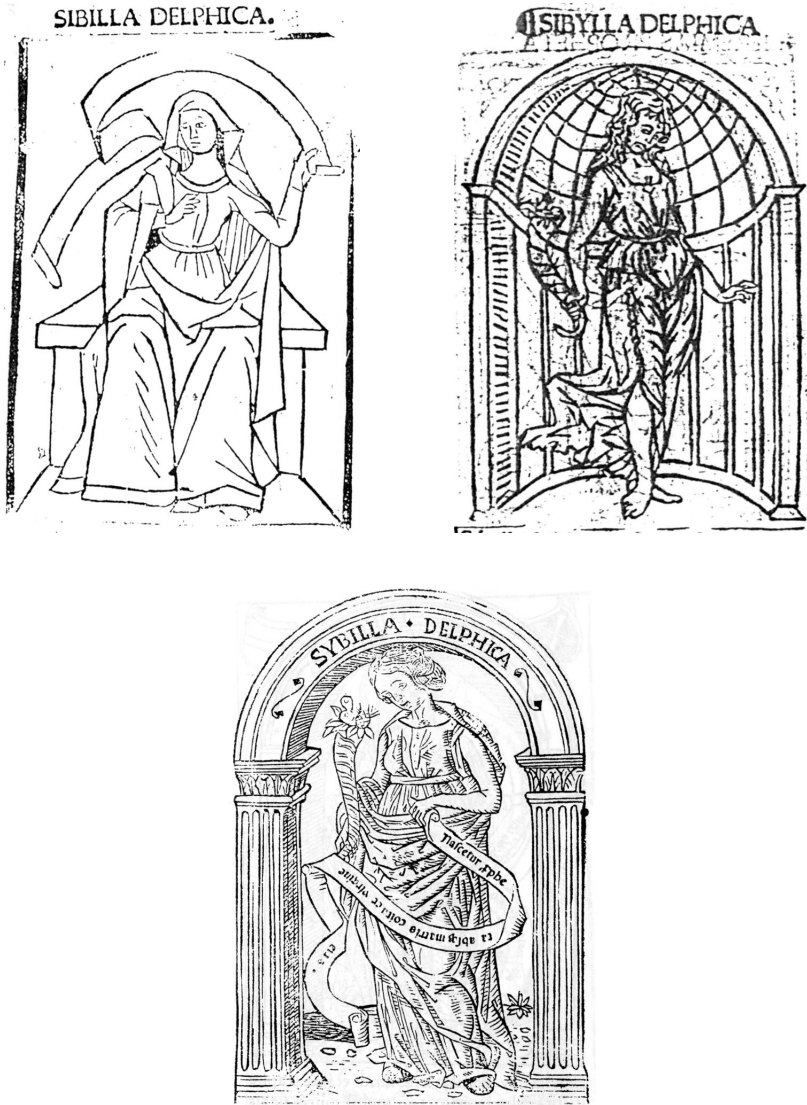


図5 デルポイのシビュラ A) 初版 B) 再版 C) 第三版

- C) *Sibylla delphica vestita veste nigra et capillis circumligatis in manu cornu tenens et iuvenis quae ante troiano bella vaticinata est de qua Crysippus ait. Nascetur propheta absque matris coitu ex virgine eius.*
- A) デルポイのシビュラ。トロイア戦争以前に予言を下し、彼女についてクリュシッポスが述べている。預言者は処女から、婚姻の交接なしに生まれなければならない。
- B) C) デルポイのシビュラ。黒い衣服を身につけ、髪は巻き毛で、手に角笛をもち、年齢は若い。トロイア戦争以前に予言を下し、彼女についてクリュシッポスが述べている。預言者は処女から、婚姻の交接なしに生まれる。

初版に記されている託宣は、『12人のシビュラの予言』の同名のシビュラの託宣とほぼ一致する。再版・第三版の託宣は、バルディーニの託宣からの影響を想定することもできる（伊藤「バルディーニ」122ページ）。

- A) *Nasci debere prophetam absque matris coitu ex virgine eius.*
- B) C) *Nascetur propheta absque matris coitu ex virgine eius.*
- Bardini: *Nascetur propheta e Virgine absque humana corruptione.*

再版・第三版の挿図では、衣服を翻らせた若い女性が右手にコルノコピア（豊饒の角）をもっている。テキストや『12人のシビュラの予言』では「角笛」(cornus)と記され、バルディーニもそのように描いている（伊藤「バルディーニ」24ページ）。

(6) 預言者エレミヤ (IEREMIAS PROPHETA) [図6]。

- B) *Ieremias. xxx. Revertere virgo israhel refetere: ad civitates tuas usquequo delicias dissolueris delicias dissolveris creavit dominus filia vacua quia Novum creavit dominus super terram: femina circumdabit virum.*



図6 預言者エレミヤ

- B) エレミヤ, 31. 帰れ, 乙女イスラエルよ。帰れ, あなたの町々に。いつまで
快樂の中に浸っているのか, さ迷う娘よ。主は地上に新しきことを造った。
女が男を囲む。

この文言は、『エレミヤ書』(31・21-22)から採られており、挿図では
後ろ向きの髭の生えた男性の右手から巻物が拡がっている。

(7) エメリアのシビュラ (SIBYLLA EMERIA) [図7 A) B) C)]。

- A) Sibilla emeria in Italia nata de qua Ennius ait. In prima facie virginis ascendit
puella quedam quam vocant. Etheladrus Rohastal gentes egipti. et est pulchra
facie proluxa capillis: sedens super sedem stratam nutrit puerum: dans ei ad
comedendum lac proprium.
- B) Sibylla emeria in Italia nata: alias Chimica: vestita celestia veste deaurata
capillis per scapulas sparsas et iuvenis: de qua Ennius ait. In prima facie

virginis: ascendit puella pulchra facie pr[o]plixa capillis: sedens super sedem
stratam: dans ei ad comedendum vis proprium id est lac de coelo missum.

C) Sibylla emerita in Italia nata alias Chimica vestita celestia veste deaurata
capillis per scapulas sparsas et iuvenis de qua Ennius ait. In prima facie
virginis ascendit puella pulchra facie proplixa capillis: sedens super visem
stratam nutit puerum: dans ei ad comedendum sed proprium id est lac de
celo missum.

A) エメリアのシビュラ。イタリアに生まれ、エンニウスが述べている。処女宮
の最初の相において、美しい乙女——彼女をエジプトの民はエテラドルス・
ロアスタルと呼んでいる——が昇るだろう。彼女の容貌は美しく、髪は豊か
で、広い椅子に座り、彼女は幼児に自分の乳を与えて育てるだろう。

B) C) エメリアのシビュラ。イタリアに生まれ、キメリアの (Chimica) とも
呼ばれ、黄金をちりばめた空色の衣服を身につけ、髪は肩まで広がっており、
年齢は若く、彼女についてエンニウスが言及している。処女宮の第一の相に
おいて、美しい、髪が長い乙女が昇るだろう。広い椅子に座り、天から送ら
れた幼児に自分の乳を与えて育てるだろう。

初版の託宣は、『12人のシビュラの予言』のキメリアのシビュラの託宣
に拠っている (伊藤「オルシーニ」85ページ)。ただし、『12人のシビュラ
の予言』の末尾にある、この幼児を「ある人はイエスと呼ぶ」(quem quendam
gens vocat Jhesum) が省略されている。再版・第三版とも「彼女をエジ
プトの民……」を省略し、この幼児が「天から送られた」という部分を最
後に付加している。この箇所は、バルディーニの「天から送られた乳によっ
て……養う」(nutiet ... lacte celitus misso) の記述に影響されているかも
しれない (伊藤「バルディーニ」123ページ)。再版の挿図では、前から風
を受けるような躍動感に溢れる、髪が長い若い女性が左手にもつ巻紙は空
中に翻っている。



図7 エメリアのシビュラ A) 初版 B) 再版 C) 第三版



図8 預言者ヨエル

(8) 預言者ヨエル (IOEL PROPHETA) [図8]。

B) *Ioel.ii. In diebus illis effundam spiritum meum et dabo prodigia in coelo et in terra: sanguinem et ignem et vaporem sumi.*

B) ヨエル, 2。これらの日々に私はわが霊を注ぎ, 天には徴を与え, 地には血と火と煙の蒸気を与えるだろう。

この文言は『ヨエル書』(2・19-30, マソラ本文では3・2-3)に見いだされる。挿絵のヨエルは, パルシアのシビュラのように, おそらくは盲目で, 左手で杖をついている。

(9) 「最も高貴な」エリユトライのシビュラ (SIBYLLA ERITHREA) [図9 A) B) C)]。

A) *Sibilla nobilissima heritheia in Babilonia orta de cristo sic ait: De excelso celorum habitaculo prospexit deus humiles suos: et nascetur in diebus*

novissimis de virgine hebrae filius in cunabulis terre.

- B) Sibylla nobilissima erithea in Babilonia orta: de xristo sic ait. In ultima autem etate humiliabitur deus et humanabitur proles divina iungetur humanitati divinitas. Iacebit in feno agnus et officio puellari educabitur deus et homo. Signa precedent apud appellas. Mulier vetustissima puerum previum concipiet. Boetes orbis mirabitur ducatum prestabit ad ortum.
- C) Sibylla nobilissima erithea in Babilonia orta de xristo sic ait. In ultima autem etate humiliabitur deus et humanabitur proles divina iungetur humanitati divinitas. Iacebit in feno agnus et officio puellari educabitur deus et homo. Signa precedent apud appellas. Mulier vetustissima puerum previum concipiet. Boetes orbis mirabitur ducatum prestabit ad ortum.
- A) 最も高貴なエリユトライのシビュラ。バビロニア生まれで、キリストについて次のように述べている。天の至上の住居から、神は自らの哀れな者たちを眺めた。そして、近日中に、地上の揺籃の中に、子どもがヘブライの処女から生まれるだろう。
- B) C) 最も高貴なエリユトライのシビュラ。バビロニア生まれで、キリストについて次のように述べている。最後の時に、神は卑しめられ、神の子は人間となり、神性は人間性と結びつけられるだろう。羊は干し草の中に横たわり、乙女の務めによって神でもある人が生みだされる。徴がアベレース〔ヘブライ人?〕のもとで先立ち、年老いた女が予見する者を孕み、天の牛飼い〔うしかい座〕を驚かし、指導者を生誕へともたらず。

初版の託宣は『12人のシビュラの託宣』の同名のシビュラから全面的に採られている（伊藤「オルシーニ」86ページ）。一方、再版・第三版に現われている奇妙な託宣は、『12人のシビュラの託宣』におけるサモスのシビュラの託宣に見られるもので（伊藤「オルシーニ」89ページ）、中世後期の予言書『エリユトライのシビュラの予言』（*Vaticium Sibylale Erythrae*）

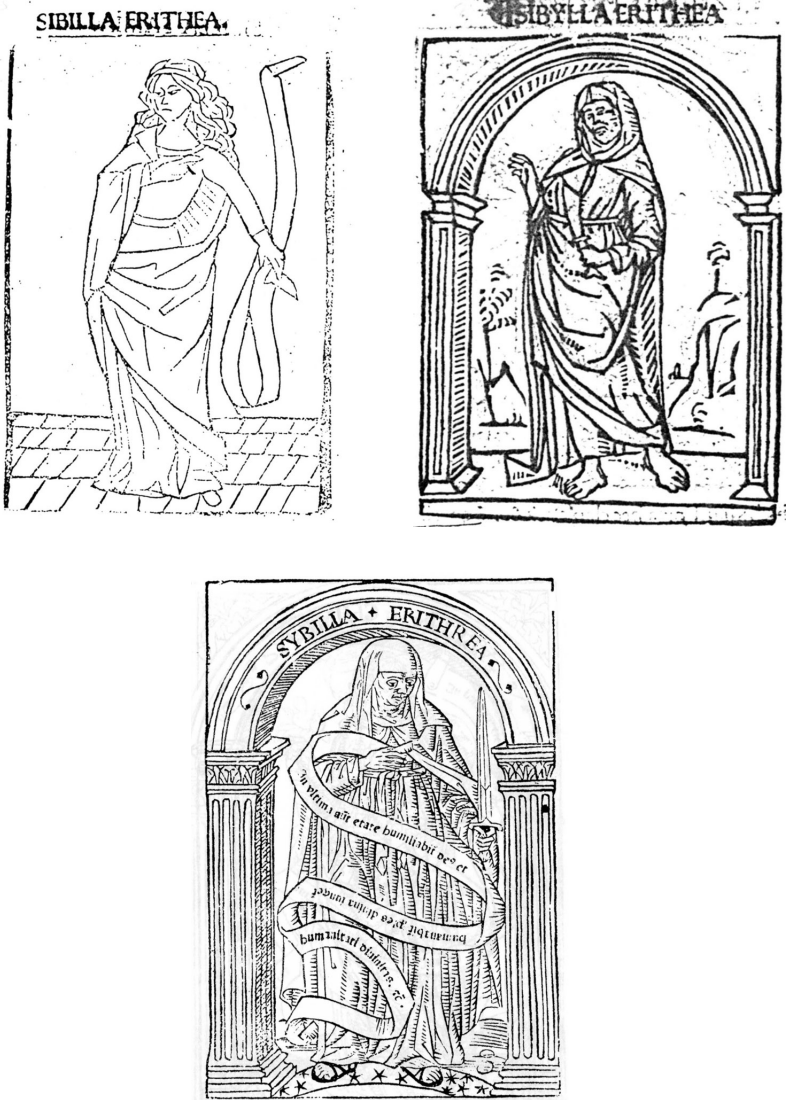


図9 エリュトライのシビュラ A) 初版 B) 再版 C) 第三版

に遡る¹⁷。

バルビエーリのテキストでは、このシビュラの容姿などについては触れられていない。『12人のシビュラの託宣』においては、「右手に重く恐ろしい、湾曲した剣をもち、修道女のような、やや白い衣服を着ている」と述べられていたが、バルビエーリ第三版の挿絵では、バルディーニと同様に（伊藤「バルディーニ」126-127ページ）、頭巾を深く被り、左手に剣をもった老女として、伝統的な姿で描かれている。またバルビエーリ第三版では、シビュラの足元の円環に星辰が描かれており、これはバルディーニと共通している。

(10) 預言者エゼキエル (EZECHIEL PROPHETA) [図10]。

- B) Ezechiel.xliiii. Porta hec clausa erit et non aperiatur et non transibit vir per eam: quam dominus deus israel ingressus est per eam: Eritque clausa principi: princeps ipse sedebit in ea: ut comedet panem coram domino per



図10 預言者エゼキエル

viam porte vestibuli ingredietur et per viam eius egredietur.

- B) エゼキエル, 14. この門は閉じられ, 開かれることはない。誰もそこを通ってはならない。それは君主のために閉じられる。君主自身がそこに座って, 主の御前でパンを食べる。門の道を通して入り, その道を通して出るだろう。

この文言は『エゼキエル書』(44・2-3)に見いだされる。長髪で髭面の預言者は右手に棒を, 左手に巻紙をもっている。

付記: 本稿は, 令和5年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(一般)「近世におけるシビュラ図像の流布と展開」(研究代表者: 専修大学文学部教授・伊藤博明) 課題番号21K00172による研究成果の一部である。

註

- 1 ヨーロッパにおけるシビュラの伝承については, 次の拙稿も参照していただきたい。伊藤博明『ヘルメスとシビュラのイコノロジー——シエナ大聖堂に見るルネサンス期イタリアのシンクレティズム研究』, ありな書房, 1992年; 「シビュラの行方——アウグスティヌスからパラッツォ・オルシーニまで」, 『西洋中世研究』第6号(2014年), 88-112ページ; 「ラクタンティウスと『シビュラの託宣』」, 『埼玉大学紀要(教養学部)』第46巻第2号(2010年), 21-37ページ; 「ティブルのシビュラ——中世シビュラ文献の紹介と翻訳(1)」, 『埼玉大学紀要(教養学部)』第45巻第1号(2009年), 1-12ページ; 「預言者とシビュラ——キリスト教の普遍性と教会の革新をめぐって」, 上村清雄責任編集『フレスコ画の身体学——システイーナ礼拝堂の表象空間』, ありな書房, 2012年, 187-315ページ; 「クリスピン・デ・パセのシビュラ図像集の流布とメキシコにおける受容」, 『専修人文論集』第105号(2019年), 1-50ページ; 「クリスピン・デ・パセのシビュラ図像集の英語版について」, 『専修人文論集』第109号(2021年), 79-133ページ。
- 2 バルビエーリについては以下を参照。Nicco' Domenico Evola, "Fra' Filippo Barbieri cronista e filosofo siciliano del secolo XV," in *Miscellanea di studi in onore del prof. Eugenio di Carlo*, Trapani: Antonio Vento Editore, 2 voll., 1959-1960, pp.98-122: "Barbieri, Filippo," in *Dizionario biografico degli Italiani*, Roma: Istituto della Enciclopedia italiana, 1960 sqq., vol.6, 1964, coll. 138-148; Roberto Pesce, "Barbieri, Filippo," in *The Encyclopedia of the Medieval Chronicle*, Leiden - Boston: Brill, 2010, pp.141-142.
- 3 Cf. *Magistrorum ac procuratorum generalium O.P. registra litterarum minora* [1469-

- 1523], a cura di G. Meersseman e D. Planzer, in *Monumenta Ord. Praed. Historica*, XXI, Romae, 1947, pp.50–51.
- 4 Cf. *Gesamtkatalog der Wiegendrucke* (=GW), Stuttgart, 1968–, M18338; Ludwig Hain, *Repertorium Bibliographicum in quo libri omnes ab arte typographica inventa usque ad annum MD. typis expressi ordine alphabetico vel simpliciter enumerantur vel accuratius recensentur* (=H). 2 vols. Stuttgartiae, Lutetiae, 1826–38, 10857*; *Catalogue of Books Printed in the XVth Century now in the British Museum* (=BMC), 13 voll, London: 't Goy-Houten, 1963–2007, IV 33; *Indice generale degli incunaboli delle biblioteche d'Italia* (=IGI), a cura del Centro nazionale d'informazioni bibliografiche, 6 voll., Roma: Istituto poligrafico e Zecca dello Stato, Libreria dello Stato, 1943–1981, 8357; Frederik R. Goff, *Incunabula in American Libraries, A Third Census* (=Goff), Millwood (N.Y.), 1973, R187; *Incunabula Short Title Catalogue* (=ISTC), British Library, ir00187000.
- 5 ルドヴィコ・アントニオ・ムラトーリは18世紀に、ジョヴァンニを著者として本書を刊行している。*Philippi de Lignamine contiatio chronici Ricobaldini ab anno MCCCXVI ad anno MCCCCLXIX*, in *Rerum italicarum scriptores*, IX, Mediolani 1726, coll. 263–276.
- 6 Cf. GW, M18340; W. A. Copinger, *Supplement to Hain's Repertorium bibliographicum* (=HC), 2 voll., London, 1895–1902, 10858; BMC, IV 58; IGI, 8358; Goff, R188; ISTC, ir 00188000.
- 7 Cf. GW, M18341; HC, 10859; BMC, VII 1053; IGI, 8359; Goff, R189; ISTC, ir 00189000.
- 8 Cf. GW, 3384; H, 2456; Goff, B117; ISTC, ib00117000.
- 9 Cf. GW, 0338310N; Goff, B116; ISTC, ib00116000.
- 10 Cf. GW, 3388; C, 873; IGI, 1244; Goff, B115; ISTC, ib00115000.
- 11 Philippus de Barberiis, *Discordantiae sanctorum doctorum Hieronymi et Augustini*.... Roma: Johannes Philippus de Lignamine, 1 Dec. 1481. Cf. GW, 3385; HC, 873; BMC, VI 131.IA 12962; IGI, 1245; Goff, B119; ISTC, ib00118000.
- 12 Lactantius, *Divinae institutiones*, 1,6,8–14, in *Divinarum institutionum libri septem*, ed. Eberhard Heck et Antonie Wlosok, Monachii: K.G. Saur, 2005–2011, fasc. 1, pp.24–26.
- 13 Roma: Johannes Philippus de Lignamine, 1 Dec. 1481. Cf. GW 3386; HC, 2455; BMC IV 129. IA.19263; IGI 1246; ISTC ib0011900.
- 14 [Roma: Georgius Teutonicus et] Sixtus Riessinger, [ca.1482]. Cf. GW 3387; HC 2453; BMC IV 129. IA 19240; IGI 1247; Goff B120; ISTC ib0012000.
- 15 以下の拙論の該当箇所を参照されたい。『ヘルメスとシビュラのイコノロジー』, 「シビュラの行方——アウグスティヌスからパラッツォ・オルシーニまで」, 「預言者とシ

ビュラ——キリスト教の普遍性と教会の革新をめぐる]」。

- 16 Cf. Emile Mâle, *Quomodo Sibyllas recentiores artifices repraesentaverint*, Paris, 1889, pp.60–65; Idem, *L'art religieux de la fin du Moyen-Âge en France*, Paris, 1922, pp.258–61. Carlo de Clerq, “Quelque séries italiennes de Sibylles,” *Bulletin de l'Institut Historique Belge de Rome*, 48–49 (1978–79), pp.118–24; De Clerq, *op.cit.*, pp.132–34 にテキストが記載されているが、再版におけるシビュラの順序が初版・第三版とは大幅に変更されている。筆者も、伊藤『ヘルメスとシビュラのイコノロジー』（152–182ページ）において、パリ国立図書館所蔵本（Res. D. 6445）に従って同様に変更した。ブリティッシュ・ライブラリー所蔵本も2ページ順序が異なり（Cf. BMC, vol.5, p.131）、ジョン・ライランズ図書館（マンチェスター）所蔵本も別様な順序となっている。その後の調査によって筆者は、再版におけるシビュラの順序は初版のものと同ーであることを確認した。筆者が参照した版の所蔵先は以下のとおりである。オックスフォード大学ボードリー図書館（Auct. 1 Q 7.23）、パリ国立図書館（別本 Res. D. 3650）、フィレンツェのリッカルデアーナ図書館（Ed.R. 592）、ヴェネツィアのマルチャーナ図書館（INC. 1015.046）。なお、本論の骨子は、すでに伊藤「預言者とシビュラ——キリスト教の普遍性と教会の革新をめぐる」（150–163ページ）において発表しているが、本稿ではより詳細に三つの版を比較することを通して、新しい考察を加えている。また、前著において筆者は、初版についてイエール大学所蔵本（Zi 3961）を底本として、ペルシアとリビアのシビュラには託宣が欠けていると指摘したが、今回、ヴァティカン図書館所蔵本（Incunabile – Membr. IV. 29）に拠って、両者とも託宣が記されていることを確認した。
- 17 O. Holder-Egger, “Italienische Prophetien des 18. Jahrhunderts. 1.,” *Neues Archive der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde*, 15 (1890), pp.161–62. この託宣集については以下を参照。De Clerq, *op.cit.*, p.106; Paul J. Alexander, “The Diffusion of Byzantine Apocalypses in the Medieval West and the Beginnings of Joachimism,” in A. Williams (ed.), *Prophecy and Millenarianism. Essay on Honour of Majorie Reeves*, Durham (N.Y), 1980, pp.71–93; Bernard McGinn, “Teste David cum Sibylla: The Significance of the Sybilline Tradititon in the Middle Ages,” in J. Kirshner and S.F. Wemple (ed.), *Women of the Medieval World. Essays in Honor of John H. Mundy*, Oxford: Basil Blackwell, 1985, pp.30–35.